

2022年度「第8回中村元東方学術奨励賞」選評

受賞者 西田彰一

受賞作 『躍動する「国体」 笈克彦の思想と活動』（ミネルヴァ書房、2020年3月）

選考委員長 伊藤聡

本書は、大正・昭和前期における「国体」思想の担い手のひとりだった笈克彦（1872～1961）の思想と行動とを総合的に論じた著作である。

笈は帝国大学の法科に学び、ドイツに留学を経て28歳で法科大学助教授に就任、以後定年まで東京帝国大学法学部の教授を務めた法学者だった。そのいっぽうで彼は、独自の「古神道」の理論を唱え始める。笈のいう「古神道」とは、明治国家が認めていた非宗教な国家祭祀としての神道ではない。法学者として自我（精神）と「普遍我」（国家精神）との関係を追求して仏教・キリスト教等を研究した結果としてたどりついたものだった。彼によれば「古神道」こそ、太古より続く君民が一体化した宗教であり、諸宗教・思想に優越する教えなのである。その教えは、宮中での進講を通じて貞明皇后の支持を得たのをはじめ、彼の大学での講義によって薫陶を受けた法科卒業生たちによって官界にも広がった。また『古神道大義』等の著作や、定期刊行物『皇学雑誌 神ながら』を通して、学校関係者の間に普及していった。ただ、その独特の神道論については、多くの批判も存在した。

笈は「古神道」を通じて、天皇と人民が一体化した理想的国家（国体）の実現を目指した。その国民教化のための具体的実践として考案されたのが「やまとばたらき」という体操技法である。これは記紀神話を再現するものとされ、体操によって個々人の生命と国家としての日本の生命との一体化を図ろうとするものである。また「弥栄」「天晴れ」等の独特な掛け声を唱和する。笈とその信奉者は、これを宮中や国民高等学校、農業学校等で行った。特に満蒙開拓団関係の訓練施設で熱心に行われた。笈等はまた五箇条の御誓文の条文を刻んだ「誓の御柱」というモニュメントを各地に建設する運動を始めた。この運動の中心となったのが笈に心酔する二荒芳徳を中心とする「大日本弥栄会」である。

ただ、笈の思想が神道界で大きな力を持っていたのは、主に大正期までで、昭和に入るとその影響力は衰えはじめる。国体明徴が叫ばれ国粋主義が狂奔した日中戦争から太平洋戦争の時期においては、主導的な役割を果たせなくなっていた。そのこともあって、戦後に強い批判にさらされることもなく、「国体」思想研究の文脈においても、取るに足らない存在として半ば無視されてきた。

西田氏は、このように過小評価されてきた笈克彦について、戦前の国体思想とその運動において位置づけることを目指して本書を著した。笈本人はもとより、その師や弟子、親族をはじめとする交流者の著述から、この人物の思想と事績を丹念に復元している。思想形成期から晩年に至るまでを時系列的に記述していく構成で、先行研究の現状と問題点を丁寧に紹介しつつ論を進めている。その筆致は批判を極力抑えたものとなっており、中立的なスタンスを取っている。今後の多様な立場からの研究と評価に向けての意義ある方針であった。

しかしながら、中立的立場からの叙述に立ってあえて批判的になることを抑制した結果、国粋主義、国家神道、植民地主義、侵略戦争に彩られた大正から昭和初期の国体思想全体

の中での位置づけが十分に論じられていないものとなってしまったところが惜まれる。彼が戦前におけるその有力なイデオログのひとりだったのは事実であり、このことをどのように考えるのが本書から見えてこないのである。

このことと関連して、同時代の同様の国体思想・神道思想との比較検討が十分になされていないので、笈の「古神道」思想の特徴や独自性が見えてこない。特に紀平正美・鹿子木員信・蓑田胸喜など、西洋哲学者から国粹主義者・国体論者へ転向した者との比較があるとよかったのではないか。また笈が推進した「やまとばたらき」や「誓の御柱」などの奇妙で空虚な事業が、なぜ宮廷、警察官僚等を巻き込んだ大きな運動として展開したのか、多くの人びとがこの運動のどこに共感・共鳴したのかについてもさらに追究してほしかった。

さらに、彼の「古神道」に至る思想形成についてもディルタイ、ギールケ、大国隆正などの影響が言及されるが、先行研究に基づく指摘に留まり、内容に踏み込んで本格的な検討がなされていない。特にドイツ留学において西洋哲学を集中的に学んだことが、笈の思想形成にどのような影響を与え、後年の「古神道」にどのように摂取されたのかを論じてもらいたかった。彼の仏教やキリスト教への理解がどの程度のものだったのかについても、さらに踏み込んだ検討が必要だったと思う。

「やまとばたらき」についても、身体の修養・鍛錬を通じて国民の身体の改造を指向するラジオ体操などの同時期の運動・政策との関連を述べるべきだし、「誓の御柱」に関しても忠魂碑などの建設運動との関わりに言及してしかるべきであった。

以上のように本書は、思想史研究書としていくつもの問題点を含むものであるが、何より笈克彦という思想家の生涯と思想と行動の全貌を、はじめて総合的・本格的に調査検討した労作であり、間違いなく今後の笈に関する基礎文献になる重要な成果である。このような見地から、本書を中村元東方学術奨励賞として推奨するものである。

以上